久しぶりに夜更かしをしたのは、締め切り間際だったため、夢中で原稿を書いていたからだ。
午前二時を回って、さすがにうとうととなってきたので、原稿のテキストファイルを保存し、パソコンの電源を切った。
窓に張り付けた外気温計は、マイナス五度になろうとしている。明け方はさらに冷え込むだろう。火床が安定している薪ストーブの炉内に、クヌギの太い薪を入れて、ダンパーを閉じ、吸気口を絞った。そうしておけば、バーモントキャスティングスのストーブは夜明けまでとろ火で燃えてくれる。明くる朝の火熾しを楽にするためである。
ダウンベストをはおり、三和土で靴を履くと、仕事場のドアを開け、外へ出た。すぐ近くにある母屋に向かおうと、暗がりに一歩足を踏み出したところで、硬直した。
玄関先、数メートルと離れていないところに異形の影があった。
牡ジカである。
二メートル近い巨大な体躯。焦げ茶の冬毛が針金みたいに背中にケバ立っていた。太い胴体から凜々しくそそり立った頭部には、それぞれ一メートルぐらいの長さの立派な角が対になって生えていた。
そいつは、ぼくの目の前で躰を横に向けたまま、まるでどこかに展示された剥製か何かのように、じっと動かずに〝存在〟していた。

一瞬、何の冗談かと思ったほど、そいつには現実感が欠落していた。
右手に握っていたぼくのライトの光を浴びて、ふたつの目が金色にギラリと輝いたかと思うと、牡ジカは真っ黒な鼻の下にある大きな口を開けて、草食動物独特の白い四角い前歯を剥き出した。
口蓋と鼻先から、呼気が真っ白な蒸気となって噴出した。
そして、ビールを飲み過ぎた酔っぱらいが洩らすゲップのような低い声で、ぼくに向かって「ぐふぅ。」と啼いた。
金縛りに遭ったように立ちつくし、なすすべもなく目を釘付けにしているぼくの前で、牡ジカはおもむろに頭を上下させ、巨躯を揺すると、ゆっくりと真横に歩き出した。
茫然自失のまま、ライトの光を向けながら目で追ったぼくは、昏い森の闇に消えていく牡ジカのシルエットと、目にも鮮やかな白い尻毛を、ただ見送るばかりであった。
やがて刺すような冷気がひしと押し寄せてきて、ぼくはぶるっと身震いした。
のちに、アンカレッジに在住している日本人のハンティングガイドが、感慨深げにぼくに向かってこういった。―そいつはアラスカよりも、ハードだな。
そんなハードな山暮らしが、その夜の出来事から一〇年以上経った今もなお、続いている。
たかが東京から車で二時間のこの場所で。